
漆黒のイレイサー

桂木 景

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

漆黒のイレイサー

【ZPDF】

Z2606D

【作者名】

桂木 景

【あらすじ】

裏社会を震撼させた伝説の暗殺者”イレイサー”クロウは復讐のために昔の姿に戻ることに…

「釈放だ。」

警察署の牢屋に入れられていた、金髪・碧眼の黒コート姿の青年に向かつて年輩の警察官が声を掛けた。

「まだ、眠い…」

「え、い、牢屋はお前の寝床じゃないわーー！」

勢いよく布団を剥がし、青年を放り投げる。

「ルーさんのケチ。」

「ケチとかそういう問題じゃなくてだな…。」

「どうやらルーはこの青年の扱いに不自由しているようだ。」

「遅いと思って来てみれば…、行きますよクロウ。」

ビシッときまたスース姿の黒髪・茶眼の中年紳士が声を掛けた。

「ザック遅い。ここにお泊まりするって決めたのに…。」

「何を言つてるんですか。これ以上遅かつたら裁判所行きですよ。そんな面倒はイヤですからね。」

「弁護するのが弁護士の仕事じゃんか。」

クロウはベットの上にあぐらをかいてブーたれていた。

「仕事の方もまだ、片付いてないじゃないですか。」

「分かった…。行く。ルーさん、ありがと。」

「どうやら”仕事”って言つワードに反応したようだ。」

「じゃあ、こここの書類にサインしてくれ。預かつてた拳銃^{2丁}だ。箱に入つてているのはずつしりと重いクロウの愛銃、デザート・イーグル。一つ^{2kg}もあるかなり厄介な代物だ。」

「今の」時世こんな時代遅れの銃を使うなんてホントに物好きだな。

「クロウは黙つてルーが差し出した書類にサインした。」

クロウ・リード

「確かに。気を付けて帰るんだよ。それともう、食い逃げするなよ。」

ルーはわざわざ警察署の前まで送りてくれた。

「分かってるよ。田の前に猫が飛び出して来なかつたらちゃんと逃げれてたのに。」

「今回は猫だつたんですか…。」

ほとほと呆れたように言つザック。どうやらクロウは食い逃げの常習犯のようだ。

「ザック腹減つた～。事務所戻つて飯にしよ～。」

「さつき泊まるつて言い張つてたのに。おかしい人ですね。」

クスクス笑いながらザックは自分の事務所を田指して歩き始めた。

サーストン法律事務所

ザックはこここの所長をしているようだ。

「飯、飯～。」

事務所に入るなり、クロウは叫びながらソファにダイブした。

「もう！クロウさんいい加減にして下さい。仮にもここはアイザック・サーストン様の事務所なんですよ…。」

「ネフィア～どうだつていいじゃんか～。それよりも飯～。」

「仮にも法律界最高峰と言われるサーストン事務所の所長と友達だなんて、本当に信じられません！もつと品のある行動をして下さい！」

「！」

「飯～飯～。」

「ネフィア、今のクロウに何を言つても無駄だよ。それより、何か作つてあげてくれないかな？」

「ですが、所長…。」

「お願い、ね？」

ネフィアはザックに言われて渋々キッチンへと向かった。クロウは相変わらず、うめいている。

数分後、事務所においしそうな臭いが流れてきた。

「飯！しかもこれは、オニオングラタンだなー！」

いち早く反応したのは先ほどまで呻いていたクロウ。

「出来ました。キャー！クロウさんの分もちゃんとありますから、ソファで待っててくださいー！」

ネフィアに抱きつくりにしてグラタンを食べようとしているクロウ。なんと微笑ましい光景だろうか。

「いただきまーす。ウマ、ウマ。」

ネフィアは先にクロウにグラタンを渡し、ザックの方にも持つていった。

「いい加減あの品のない男と縁をお切りになられたらどうですか？」

クロウには聞こえないようにそっと告げた。

「でも彼は優秀な賞金稼ぎだし、それに私の親友でもありますから。

」ザックは苦笑いをしながら答えた。

「ネフィア、美味かつたぞ。」

「はいはい、お粗末様でした。」

クロウの食べ終わつた食器を片手にキッチンへ戻るネフィア。

「ザック、食べながらでいいから聞いてくれ。例の仕事のターゲットは見つかつたのか？」

そう、クロウは表、賞金稼ぎ。裏、殺し屋として働いているのだ。

一方、アイザックは表、ヒリート弁護士。裏、情報屋をしている。

「ナザレのことですね。」

「そうだ。今夜やろうと思つ。」

「そですか…。コレが資料です。気を付けて行ってください。」

「心配することないつて。こんな小物ちょちょいのちょいと…。」

「なんの話してんですか？」

ネフィアがキッチンから戻ってきた。

「食い逃げのことですよ。」

「クロウさんって、本当に食い意地張ってるんですねー。」

「そんなことないし…。腹が減つては戦はできぬつてな。グラタン

『馳走さん。』

ネフィアに捕まる前にクロウはそそくさと事務所をあとにした。

ナザレの屋敷

三日月を背に、若い男が中庭に降り立つた。

「侵入者だー！」

警戒中の兵士達がクロウに向かつて銃を発射する。しかし、そこにはクロウの姿はおらず…

「眠ってる。」

いつの間にか兵士の後ろに立っていたクロウはそのまま手刀で氣絶させる。

叫ばれたのが災いした。屋敷中、警報が鳴り響き兵士達が次々とあわられる。クロウをしとめる為に放たれる無数の銃弾。

しかし、彼の脅威となる弾は一発もなく、全て見切れ闇夜を彷徨う。

彼の反撃が始まった。田にもとまらぬ神速の片手撃ち。一挺2kgもある銃を2つ持ち、絶大な反動をモノともせず次々と兵士を仕留めしていく。

「何事だー！」

どうやら本命のナザレが出てきたらしい。スキンヘッドでいかにもギヤングラしい格好をしている。

「お…お前は…。」イレイサー“…”

「死を『えにきたぜ。』

月夜に照らされるクロウは、先ほどままで全く違う雰囲気を醸し出していた。

「死んだと噂されていたのに…。生きていたのか？！」
「俺が簡単にくたばると思うのか？サキを殺しておいて。復讐にきたぜ。」

碧眼が次第に紅く染まって行く。

「まつてくれ…。話せば分かる…。やめてくれ！！」

「時間だ。お休み、ナザレ。」

逃げるナザレに容赦なく放たれる一発の銃弾。正確無比にナザレの後頭部に命中し、死を与えた。

翌朝、クロウはサークル法律事務所にやつてきていた。

「報酬は振り込んでおいたぜ。」

「『苦労様。あの男はやつぱり例の事に関わってたのかい？』

「ザックの情報通りならな。アイツの顔を見ると、昔の血が騒いで

…。」

「”イレイサー”になっちゃたのかい？」

「…。」

「そつか…」

一人の男は窓から、サクラ吹雪をみて哀愁に浸っていた。

(後書き)

皆様の評価が高ければ、通常連載をしたと思つてこます。
よろしくお願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2606d/>

漆黒のイレイサー

2010年12月28日14時30分発行